

Somewhere A Master

鳥井由紀子
(昭和 55 年卒業)

私はだめな学生だった。3年生に進学しても、講義に出なかった。秋になって、柳川先生の「新宗教調査ゼミ」の部屋に行き、すみっこにすわって見ていた。そして「入れて下さい」とお願ひした。先生は、「はい、はい」と言って、テーマを決めて、英文の論文のコピーを貸してくれた。

私は、いっぱい留年した。卒業の年になって、もう退学かなと思った。先生は、「ともかく学校にいらっしゃい。こうしましょう。あなたが来なったら私が電話をかけます。」と言った。行かねばならぬ。私は学校へ出かけて行ってタバコを吸っていた。電話はかかるなかった。

秋になって、卒論を書かねばならなくなつた。

先生は、「何でもいいから書きなさい」と言った。私は自分の部屋へ帰って、「教授は学生に『何でもいいから書け』と言った」と紙に書いた。そして、目をつぶって、息を殺して、後を向いて卒論を書いた。卒業式の日、先生は、「鳥井さん今日ぐらいは、ワンピースでも着てくるかと思った」と言った。ジーンズの上下を着て、私は逃げた。いや、卒業した。

数年後、私は、岩波ホールで、「いらっしゃいませ」「ありがとうございました」をやっていた。先生にはがきを出したら、如水会館で用事があるからついでにと言って、岩波神保町ビルの第一勧銀の裏で待ち合わせをした。仕事着のスカートをは

いでいる私を見て、先生は、「何だ、口紅なんかつけてる」と言った。地下の喫茶店でサンドイッチを食べた。私は、カナダのポワリエという人の映画の話をして、「なるほど女はどこでも同じです」と話した。先生は、病院で会った女の人が、大学に行きたかったのに受けなかったと嘆いた話をした。そして突然、「それじゃあ、来年、大学院を受けますか」と言った。私は、バカだから、この人は話がわかっているのだろうか、といぶかって。と同時に、ちょっとだけ光が見えた。その

年、私は入学した。

11年前に、はじめて会ってからこのかた、柳川先生は私に、「はあ、そうですか。それじゃあ」とばかり言っていたように思われてならない。

このごろ、やっとわかって来たような気がすることが1つある。私は、「本物の教師」に出会っていたのではなかろうか。

*この文の題名には、Elie Wieselの本の題名“Somewhere A Master”を借用しました。